「ナチズムと人種主義」考（1）
——20世紀初頭までの系譜

原　田　一　美

Versuch über "Nationalsozialismus und Rassismus" (1)

HARADA Kazumi

はじめに

ホロコーストの犠牲者はおよそ600万人とされているが，ナチスによって殺されたのはユダヤ人だけではない。いわゆる「ジプシー」（シンティ，ロマ）も50万人以上が犠牲となった。また，ナチスは，1941年6月の独ソ戦開始後に捕虜として捕らえたソ連人兵士に十分な食料を与えず，その結果，42年2月までに335万人の捕虜のうち60パーセントが飢えや病気で死亡したと言われている[1)]。

ナチスの犠牲者はドイツ人にも及んだ。肉体的精神的に障害をもつ7万人の人びとが「安楽死」の名の下で殺され，浮浪者，常習犯，売春婦，仕事嫌いといった「反社会的分子」の烙印を押された人びとは，何万と強制収容所に収容されて劣悪な待遇のために死んでいった[2)]。また，「遺伝病子孫防止法」に基づいて断種措置を施された人の数は，40万にものぼると言われる[3)]。

このようなナチスの蛮行を可能にしたのは，第三帝国において国家公式の教義となった人種主義であった。1990年代初頭，バーリーとヴィッパーマンは，ナチスの目標は「人種原理に基づくユートピア社会の創出」だったのであり，第三帝国は「全体主義国家」とい

平成17年11月25日　原稿受理
大阪産業大学　人間環境学部教授

1）矢野久『ナチス・ドイツの外国人—強制労働の社会史』（現代書館，2004年），74頁。
2）Vgl. Wolfgang Ayass, "*Asoziale*" *im Nationalsozialismus,* Stuttgart 1995.
3）Gisela Bock, *Zwangssterilisation im Nationalsozialismus. Studien zur Rassenpolitik und Frauenpolitik,* Opladen 1986, S.8.

うよりも「人種主義国家」であったとして，ナチスによる種々の政策を人種主義の観点から解釈していくべきだと主張した[4)]。しかし，第三帝国の人種主義的側面への注目，人種主義的政策の研究は，すでに80年代から始まっていた。クレーによる「安楽死」研究や，ボックによる強制断種の研究から現在にいたるまで，「ナチズムと人種主義」に関わる研究は増加の一途を辿っている[5)]。

ホロコーストについて，ゴールドハーゲンは，ドイツ人の強烈な反ユダヤ主義がそれを可能にしたのだと主張して，議論を巻き起こした[6)]。このようなゴールドハーゲン・テーゼに対して，クーンズは，ヒトラーによる政権掌握まではユダヤ人に対する態度（反ユダヤ主義の度合い）において，ドイツと他の欧米諸国には大きな違いはなかったと主張している[7)]。本稿では，反ユダヤ主義よりも広い人種主義についても，クーンズの主張と同じこと――少なくとも第一次世界大戦までは，人種主義の普及という点で，欧米諸国とドイツのあいだに大きな相違はなかったということ――が言えることを示したい。ナチスの人種主義は，けっしてナチ党特有のものでも，またドイツに特有のものでもなかったのである。

ナチスの人種主義には，19世紀以降にドイツばかりでなく欧米諸国で現れたさまざまな思想・学問・考え方が流れ込んでいる。本稿では，大きく分けて二つの流れに注目したい。「人類学的人種主義」と「衛生学的人種主義」（優生学）である[8)]。とはいえ，これら二つの潮流はけっして截然と分けられるわけではなく，重なり合う部分も多かったことが示されるはずである。

ところで，本論に入る前に，人種主義という概念について説明しておく必要があるだろう。本稿で用いる人種主義（Rassismus，racism）は，生物学的な「人種」（Rasse,

4）Vgl. Michael Burleigh/Wolfgang Wippermann, *The Racial State: Germany 1933-1945*, Cambridge University Press 1991.

5）Ernst Klee, *"Euthanasie" im NS-Staat. Die "Vernichtung lebensunwerten Lebens"*, Frankfurt/M 1983 ; Bock, *op. cit.* また，最近では，カイザー・ヴィルヘルム研究所における人種研究に関する研究や，研究者（専門家）のナチ体制への関与についての研究が増えてきている。たとえば，以下を参照。Hans-Walter Schmuhl (Hg.), *Rassenforschung an Kaiser-Wilhelm-Instituten vor und nach 1933,* Göttingen 2003.

6）Vgl. Daniel Jonah Goldhagen, *Hitler's Willing Excecutioners. Ordinary Germans and the Holocaust,* New York 1996.

7）Claudia Koonz, *The Nazi Conscience,* The Belknap Press of Harvard University Press 2003, S.11.

8）この命名はボックによる（Bock, *op. cit.*, S. 61）。本稿におけるこの分類は便宜上のものにすぎない。バーリー/ヴィッパーマンは，人種人類学，人種衛生学，人種論的反ユダヤ主義に分けて，それらの系譜を探っている。Vgl. Burleigh/Wippermann, *op.cit.*

race）の間に優劣をつけるイデオロギーや「人種」の違いに基づいた差別的行為だけを指すのではない。ボックによれば，人種主義とは，一定の人間集団を，より価値があると想定された集団の社会的・文化的基準に基づいて，「劣等」だと分類し，そのように取り扱うことであり，本稿でも，そのような意味で用いる[9]。

I 「人類学的人種主義」の系譜

「人類学的人種主義」あるいは「アーリア神話」は，反ユダヤ主義と同様，けっしてドイツだけに限られた現象ではなかった。欧米における人種主義の起源を探り，その歴史を明らかにしようとする研究は，ナチスによる「アーリア人至上主義」に危機感を抱いた研究者などによってすでに早くから行われている。

たとえば，アメリカの人類学者ベネディクトは，まだナチスが政権の座にあった1940年に，人種に関する言説の混乱を整理し，「なぜ，人種主義が今日これほど社会的に重要とされるのか」を理解するために，『人種主義　科学と政治』（原題）を著した[10]。人種主義そのものの研究ではないが，アーレントは，『全体主義の起源』の第2部「帝国主義」において，人種主義の問題を取り上げている[11]。

さらに，ポリアコフの『アーリア神話』[12]や，モッセの『ヨーロッパにおける人種主義の歴史』[13]，ガイスの『人種主義の歴史』[14]など，人種主義の起源とその歴史を探究しよう

9）Gisela Bock, Krankenmord, Judenmord und nationalsozialistische Rassenpolitik: Überlegungen zu einigen neueren Forschungshypothesen, in: Frank Bajohr/Werner Johe/Uwe Lohalm (Hg.), *Zivilisation und Barbarei. Die widersprüchlichen Potentiale der Moderne,* Hamburg 1991, S.301.「人種」は，一般に人間集団の生物学的分類概念として用いられてきたが，近年では，「人種」も社会的構築物にすぎないと考えられるようになっている。人種概念の問題性については，以下を参照。竹沢泰子「人種概念の包括的理解に向けて」，竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う—西洋的パラダイムを超えて』（人文書院，2005年），9-109頁。そのような意味で，正確には「人種」とカッコをつけて表記するべきなのであろうが，本論では，煩雑になるので基本的にはそうしない。

10）R・ベネディクト（筒井清忠他訳）『人種主義　その批判的考察』（名古屋大学出版会，1997年）。本書は，マーガレット・ミードの「序文」を付して1959年に出版されたものを底本として，さらにベネディクト研究者のポーリン・ケントの「解説」を加えて翻訳されたものである。本文中の引用は，171頁。

11）ハナ・アーレント（大島通義他訳）『全体主義の起源　2　帝国主義』（みすず書房，1972年）。原著は，1951年の出版。

12）レオン・ポリアコフ（アーリア主義研究会訳）『アーリア神話——ヨーロッパにおける人種主義と民族主義の源泉』（法政大学出版局，1985年）。原著は，1971年の出版。

13）George L. Mosse, *Die Geschichte des Rassismus in Europa,* Frankfurt /M 1990. これは，1978年に出版された英語版のドイツ語訳である。

とする試みには事欠かない。人種主義はつねに特定の社会集団を担い手として，その支配要求を正当化するために利用されてきたと主張するプリースターの『人種主義の社会史』[15]は，もっとも新しい人種主義史研究のひとつである。

欧米における人種主義的発想の起源を辿っていけば，おそらく「ヘレネス」と「バルバロイ」を区別した古代ギリシアにまで遡ることができるであろう[16]。だが，ここでは，近代人種主義の基礎がおかれたのは18世紀であると考え[17]，人種に関する言説が欧米においてどのような形で広まっていくのかを，上記の著作を参考にしながら概観してみたい。

欧米の人種主義は，本来は系譜の異なるさまざまな要素が絡まり合って成立してくる。なかでも，3つの要素が重要だと思われる。それは，（1）貴族による人種主義的発想，（2）自然科学（博物学）による人間の分類（とりわけ，人類学の発展），そして（3）言語学の発展，である。

（1）貴族による人種論は，とくにフランスにおいて顕著であった。これをもっともまとまった形で提示したのは，フランス人貴族のアンリ・ドゥ・ブーランヴィリエ（1658～1722）である。彼は，その死後に（1727年）出版された『フランス貴族について』という本の中で，フランス貴族はフランク人（ゲルマン人）の子孫であり，大多数のフランス人民衆とは出自が異なると主張し，「純粋な血」を維持した貴族の優越性を強調した[18]。ブーランヴィリエは，当時すでに没落に脅かされていた貴族の特権を維持すべく，その優越性あるいは支配を「血の純粋性」から正当化しようとしたのである。ここにはすでに，「血の純粋性」の観念など，のちの人種主義の要素が現れている。このような保守的な貴族の人種主義的発想は，反啓蒙主義の立場から出たものであるが，次に見る自然科学の発展は，まさに啓蒙の世紀の産物であった。

14）Imanuel Geiss, *Geschichte des Rassismus,* Frankfurt/M 1988.

15）Karin Priester, *Rassismus. Eine Sozialgeschichte,* Leipzig 2003.

16）ヒトラー自身，スパルタは，人種的観点に導かれた国家の模範だと考えていた。Frank-Lothar Kroll, *Utopie als Ideologie. Geschichtsdenken und politisches Handeln im Dritten Reich,* Paderborn 1999, S.76.

17）プリースターは，人種主義の「誕生時点」を1492年としている。彼女は，人種主義とは，近代の諸条件の下で，前近代的構造およびヒエラルヒーを維持しようとしたり，あるいはこれらを，社会的関係を生物学化することによって再び構築しようとする政治的戦略である考え，あえて，ヨーロッパが海外進出を開始すると同時に，スペインからユダヤ人が追放された1492年を「起点」として設定している。Vgl. Priester, *op. cit.,* S.17-42. そもそも人種概念の起源をめぐっては，人種概念普遍説と近代西洋起源説との間の論争があり，現在では後者が主流となっているという。竹沢，前掲論文，20～27頁を参照。

18）Priester, *op. cit.,* S.46-48.

（2）18世紀は博物学の全盛期であり，植物や動物の分類が盛んに試みられた。むろん人間もその対象となった。たとえば，スウェーデン人のカール・フォン・リンネ（1707～78）は，人間を4つの変種に分類している。白いヨーロッパ人，赤いアメリカ人，蒼いアジア人，黒いアフリカ人である[19]。また，浩瀚な『博物誌』を著したフランス人C・ビュフォン（1707～88）も「ヒトという種における変異（変種）」を6つ――ラップ人，タルタル人，南アジア人，ヨーロッパ人，エチオピア人，アメリカ人――に分けている[20]。

その後の人種分類にもっとも大きな影響を与えたのは，形質人類学の創始者とみなされるドイツのヨハン・フリードリヒ・ブルーメンバハ（1752～1840）である。彼は，収集した頭蓋骨を基にして人類を5つの変種に分類し，それぞれに皮膚の色を割り振った。コーカサス人（白色），モンゴル人（黄色），エチオピア人（黒色），アメリカ人（あるいはインディアン，赤銅色），マレー人（黄褐色）の5つである。彼が白人をコーカサス人と名づけた理由は，「この山の近くに，もっとも美しい種族（Menschenstamm）のグルジア人がいるからであり，また，人類に発祥の地を指定することができるとすれば，…この場所以外には考えられないからである」[21]。ブルーメンバハのこの分類から，のちに「コーカサス人種（コーカソイド）と「モンゴル人種（モンゴロイド）」という言葉が作られた。

18世紀から19世紀にかけて博物学者や人類学者などが行った人間の分類は，いくらでも挙げることができる。形質人類学者は，頭蓋骨の測定から，「顔面角」（顎がどの程度突き出ているか）や「頭指数」（真上からみた頭の最大の長さに対する最大幅の割合，長頭か短頭か）を割り出し，また，身長，毛髪の色，鼻の形などの測定や観察に基づいて，人種分類を行った。コーカサス人種もさらにさまざまな下位集団に分類された。ベネディクトによれば，もっとも一般的な分類法は，北方人，アルプス人，地中海人の3つの下位集団に分けるものだという[22]。のちに，ナチスは人種ヒエラルヒーを構築する際に，このような下位集団への分類を利用することになる。

さて，19世紀後半の人種論者たちは，コーカサス人（種）よりもアーリア人（種）という言葉を用いるようになっていくが，この変化には，18世紀末から19世紀初めにかけての言語学の発展が関係していた。

（3）1788年，イギリス人のウィリアム・ジョーンズ（1746～94）は，サンスクリット

19）ポリアコフ，前掲書，214頁。

20）竹沢，前掲論文，53～54頁。

21）Werner Conze, Rasse, in: *Geschichtliche Grundbegriff,* Bd.5, S.149f; Priester, *op. cit.,* S.63. ポリアコフ，前掲書，230頁。

22）ベネディクト，前掲書，42頁。

語とギリシア語・ラテン語との近親関係を主張する研究を発表し，この考えは多くの東洋学者に受け入れられた。そして，19世紀初め，ドイツのロマン主義者フリードリヒ・フォン・シュレーゲル（1772～1829）は，両者の言語の類縁関係から人種の親戚関係を引き出した。「すべてが，まったくすべてがインドに端を発している」と[23]。

シュレーゲルは，当初はまだアーリア人という言葉を用いてはいなかったが，その後，インド＝ヨーロッパ人やアーリア人，さらにインド＝ゲルマン人という言葉が作られて用いられるようになっていく。ポリアコフによれば，ドイツでは，インド＝ゲルマン人が一般に用いられ，他の諸国ではインド＝ヨーロッパ人という用語が好まれた[24]。また，興味深いことに，のちにナチスに利用されるアーリア人という用語は，19世紀にはむしろ英仏における方が好意的に迎えられたという[25]。こうして，19世紀初めには，人種主義に流れ込んでいく３つの要素が出そろった。

むろん，人間を種々の集団に分類し，それらの集団に名前をつけることがただちに人種主義に結びつくわけではない。人間の分類を行ったリンネ，ビュフォン，ブルーメンバハなどは，白人は「もっとも容貌が整った人間」であるとか，「創意性や発明の才に富んで」いると考えていたが，それでも人種（変種）間の明確なヒエラルヒーを想定していたわけではない。ブルーメンバハにとって，５つの変種は，原則としてそれ自体良いものでも悪いものでもなかった[26]。また，インド＝ヨーロッパ人やアーリア人は，そもそも言語（文化）の区分を表す言葉であって，人種（自然）を指す言葉ではなかった。

ところが，19世紀半ばころまでには，アーリア人という言葉（観念）が，上述の貴族人種主義における「血の純粋性」，名誉，忠誠，勇気といった観念，さらにコーカサス人(種)と結びついていった。「言語から人種への跳躍」[27]が生じたのである。そして，「人種としてのアーリア人」という考えを理論化したのは，フランス人のジョゼフ・アルチュール・

23）ポリアコフ，前掲書，252～254頁。

24）同上書，257頁。ちなみに，「アーリア人」という言葉は，新たに作られたものではなく，もともとペルシア人とメディア人に対して用いられていたこの言葉を，シュレーゲルが，「アリ」をゲルマン語の「エール」（名誉）と結びつけて推奨したのだという。

25）同上書，264-65頁。ポリアコフは，ドイツ人のサンスクリット学者マックス・ミュラーの言葉――「・・・またこの用語［アーリア人］がドイツではイギリスやフランスにおけるほど一般に受け入れられていないので，・・・」――を引用して，こう判断しているが，アーリア人という言葉は，イギリスでは大きな支持を得られなかったという見解もある。ロバート・ムーア（五十嵐泰正訳）「19世紀ヨーロッパにおける人種と不平等―身体と歴史」，竹沢編，前掲書所収，129頁を参照。

26）ポリアコフ，前掲書，230頁。

27）Conze, op. cit., S.159.

ゴビノー（1816～82）であった。

ゴビノーが『人種の不平等性について』（1853～55）で展開した考えは，3つのテーゼから出発している。第一に，人種はアプリオリに不平等であるということ，第二に，社会階層の形成は，人種の違いによって説明されるということ，そして第三に，文明化したあらゆる民族は将来，かならず文化的に衰退するという悲観的な歴史観である[28]。そもそも，ゴビノーの第一の関心は，貴族がなぜ「自然の与えた地位」を失ったのかを説明すること，また，諸民族（文明）の衰退，滅亡の法則を発見することであった。そして，彼が見いだした答えは，人種混淆によって引き起こされた人種の退化であった。

人種間の不平等の主張や，貴族と民衆は人種構成が異なるという主張は，すでにブーランヴィリエにも見られた考えであり，目新しいものではなかったが，ゴビノーの理論の新奇性は，人種混淆による退化という主張にあった。しかも，ゴビノーによれば，この退化は，知性や活動力で際だっている（「美と知性と力をひとりじめ」している）アーリア人（白人）も免れることができないものであった[29]。ゴビノーは，のちに彼から「混淆の危険性」という考えを引き継ぎ，同時に「アーリア人の血の純粋性」を強調したナチスとは違って，ヨーロッパには純粋な人種や民族などいないと考えていたのである。

ゴビノーは，のちに「ナチズムの人種主義の父」として位置づけられことになるが，彼の考えは，その生存中はフランスにおいても注目されることはなかった[30]。40年以上経って，ゴビノーの著書を発見し，彼の主張を本来の考えとは異なる形で広めたのは，ドイツ人である。この点については，次章で触れたい。

ゴビノーの主張をさらに押し進め，ナチスの人種主義にもっとも大きな影響を与えることになるのは，イギリス人のヒューストン・スチュアート・チェンバレン（1855～1927）である。彼は，周知のように，リヒャルト・ヴァーグナーの死後その娘と結婚し，バイロイトに移り住み，この地で亡くなった。彼がドイツで出版した『19世紀の基礎』（1899年）はベストセラーとなり，ヴィルヘルム2世をも熱狂させたという[31]。また，ナチ党のイデオローグ，アルフレート・ローゼンベルクがその主著を『20世紀の神話』と名づけたのも，彼の影響を受けてのことであった。

チェンバレンにとって，人種は人間に自分自身を越えさせ，超自然的ともいえる能力を

28）Priester, *op. cit.*, S. 78.

29）*Ibid.*, S. 81. ポリアコフ，前掲書，312頁。

30）アーレント，前掲書，

31）ポリアコフ，前掲書，425頁。Detlev Claussen, *Was ist Rassismus*?, Darmstadt 1994, S. 93. なお，本書は，ゴビノー，チェンバレン，ヒトラーなどの著書や演説の一部を，著者のコメントを付して掲載したものである。

与えるものであり，人種の特質こそ決定的に重要であった。チェンバレンは，人種間の不平等について論じたゴビノーの著作を天才的な業績だと評価するが，ゴビノーの貴族主義は拒否し，またすべての人種は混淆とそれによる退化を免れることができないとしたゴビノーの悲観主義も共有しなかった。「高貴な人種は初めから高貴なのではなく，徐々にそうなるのである」[32]。そして，そのための「育種」を重視し，高貴な人種をつくり上げるための５つの自然法則を提示している[33]が，このような態度には，当時新興の科学として注目されつつあった優生学の影響を見ることができる。

チェンバレンは，近代科学はもっぱらゲルマン人(ケルト人，スラヴ人，チュートン[ドイツ] 人を含み，「北方ヨーロッパ人」とも表現）の業績であり，彼らこそ世界史の担い手であると考える。そして，このゲルマン人に「対抗人種」としてのユダヤ人を対置した[34]。このような考え方は，のちに，世界史はゲルマン人種対ユダヤ人種の世界観闘争に規定されていると考えたヒトラーたちナチスの発想に流れ込んでいく[35]。

以上見てきたように，18世紀以降のヨーロッパでは，博物学や人類学の知見に，白人の優越性の強調するようなさまざまな観念――ここでは触れることができなかったが，ギリシアの彫刻に見られるような古典古代の美意識，あるいは白を美しいとする感性なども含めて――が混じり合っていった。ダーウィニズムの影響も忘れることはできない。生物は，単純なものから自然選択によって様々に分岐しながら進化してきたというダーウィンの進化論によって，人類も進化の階梯の中に位置づけられるようになった。もっとも進化したヨーロッパ人と，「野蛮」や「未開」の状態にとどまっているアフリカ人やアジア人というヒエラルヒー化がますます強められ，生物学的な「人種」と文化の混同もいっそう進んだのである[36]。

こうして，世紀転換期の欧米人にとって，自分たちの人種的優越性，文化的優越性は異論の余地のない自明のことがらとなっていた[37]。それでは，このような欧米における人種

32) Claussen, *op.cit.*, S. 71.

33) *Ibid.*, S. 81-91.

34) *Ibid.*, S. 92. また，Priester, *op.cit.*, S. 97-101，ポリアコフ，前掲書，419頁も参照。

35) ヒトラーのこうした発想については，以下を参照。Kroll, *op.cit.*, S. 49-56. なお，言うまでもなく，ヒトラーのいう「ゲルマン人」には，スラヴ人やケルト人は含まれておらず，チェンバレンの「ゲルマン人」概念よりもその中身は狭められている。

36) 人文・社会科学へのダーウィニズムの影響については，阪上孝「ダーウィニズムと人文・社会科学」，阪上孝編『変異するダーウィニズム―進化論と社会』（京都大学学術出版会，2003年）所収，３-43頁を参照。

37) ただ，「人種」という概念は，つねに「民族」や「国民」と混同されて使用されたし，また，同じように「アーリア人」ないし「ゲルマン人」という言葉を使用していても，論者によってその中身は相当に異なっていたということには，注意しておく必要がある。

主義的発想の強化のなかで，ドイツはどのような位置を占めるのだろうか。人種主義における「ドイツ特有の道」について語ることは可能なのだろうか。そこで，次章では，19世紀から20世紀初頭にかけてドイツではどのような形で人種論が普及していくのかについて見てみたい。

Ⅱ　ドイツにおける民族と人種

ドイツにおける人種論の展開について考察する際に欠かすことができないのは，第二帝政期に成立してくる「民族至上主義的」（völkisch）と総称される思想や運動である[38]。民族至上主義思想あるいは運動については，すでに多くの研究がなされており，ナチズムの先駆者的役割を指摘する研究者もいる[39]。ここでは，民族至上主義者のいう民族が，いかに人種と分かち難く結びついていたのかを見てみたい。

ドイツにおける民族至上主義思想は，「19世紀ヨーロッパのロマン主義運動の直接の産物」[40]だと言われるが，ロマン主義は，啓蒙主義の唱える合理主義や理性に，非合理的なもの，感情的なものを対置した。「二重革命の時代」（ホブスボーム）における政治的・経済的・社会的激動のなかで，しかも，英仏とは違って「国民国家の未成立」という状態のなかで，ドイツ人が自らのアイデンティティの大いなる拠り所として発見したのが，民族であった。

たしかに，民族を極端に称揚し，至上価値として神聖視する民族至上主義がドイツに広がり始めるのは，国民国家が成立した――オーストリアを除く「小ドイツ主義」という形

38）「民族至上主義的」という形容詞は，フォルク（民族）から派生したものであるが，ドイツ語のフォルクは，「民族」以外に，「民衆」や「庶民」，さらには「人民」という意味ももつ非常に多義的な言葉であり，日本語に翻訳するのが難しい。そのため，最近ではそのまま「フェルキッシュ」とされることも多くなっている。たとえば，ジョージ・L・モッセ（植村和秀他訳）『フェルキッシュ革命―ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ』（柏書房，1998年）。また，フォルクの多義性については，田村栄子『若き教養市民層とナチズム―ドイツ青年・学生運動の思想の社会史』（名古屋大学出版会，1996年）も参照。

39）前掲のモッセの本に加えて，たとえば以下を参照。Uwe Puschner, *Die völkische Bewegung im wilhelminischen Kaiserreich. Sprache—Rasse—Religion,* Darmstadt 2001. 竹中は，民族至上主義思想や運動が示した，近代に対する両義性や政治的両義性を把握できるという理由から，これらの思想や運動を「原理主義」と特徴づけようとする意欲的な試みを行っている。竹中亨『帰依する世紀末―ドイツ近代の原理主義群像』（ミネルヴァ書房，2004年）。

40）モッセ，前掲書，29頁。

ではあったが――1871年以降であった。ここには，形式的な政治的統一が真の民族意識をもたらさなかったという失望，また，第二帝政期に急激に進展する工業化，都市化が人間の疎外，あるいは民族の退化をもたらすという危機感が作用していた。だが，ドイツ帝国設立以前に，のちに民族至上主義者たちが養分を引き出すことになる土壌はすでにしっかりと整えられていた。

こうした土壌を作り上げたもっとも重要な人物は，ヴィルヘルム・ハインリヒ・リール（1823～97）である。彼は，『ラントと人びと』（1857～63）において，機械的・物質主義的な文明をきっぱりと拒否し，自然（＝風土）に根ざした民族の文化をその対極においた。自然は，人間に誠実さ，完全さ，素朴さという性質を与えるものであり，そのような自然に根ざした民族こそが真正なのである[41]。また，リールは，土にもっとも親しんでいる農民こそもっとも真正な人間であるとして農民を賛美し，農民が民族にとっていかに重要かを強調し，ナチ党の農本主義者ダレーに大きな影響を与えることになる[42]。

モッセによれば，民族至上主義運動に創立者がいたとすれば，それはラガルドであり，創立者の次に預言者をもったとすれば，それはラングベーンであった[43]。この二人は，民族や自然の称揚に宗教的要素を加味して，いわば「ゲルマン的信仰（ゲルマン的宗教）」にまで高めたのである。

ポール・ドゥ・ラガルド（1827～91）は，『ドイツ書』（1878）のなかで，彼が真正の国民と民族に見いだされるはずだと考えた生命力をいかにして活性化させるのかについて考察している。ラガルドは，民族の内的な態度を重視し，その霊的な諸力を再編成するためにこそ，伝統的なキリスト教ではないゲルマン的信仰が必要だと主張した。ドイツ民族には，生得的に霊的諸力が備わっているが，工業化や都市化などによってそれが失われていっているというのである[44]。

ユリウス・ラングベーン（1851～1907）の『教育者としてのレンブラント』（1890）は，世紀転換期のドイツの青年たちに大きな影響を与えたと言われている。ラングベーンは，民族に帰属し，民族のエートスにしたがって自分自身を作る上げることこそ，人間を創造的にするのだと主張し，その際，コスモスから下降し，民族を通して個々人に伝えられる「原初のエネルギー」（＝生気）を重視した。こうして，彼は，ラガルドよりもいっそう神秘主義，宗教色を強めた[45]。

41）同上書，36～43頁。
42）ダレーの農民観については，以下を参照。Kroll, *op.cit.*, S.163-170.
43）モッセ，前掲書，51頁。
44）同上書，52～57頁。
45）同上書，62～67頁。

リールのいう民族には，まだ人種や血の要素は入り込んでいなかった。ラガルドの場合も，「ドイツ的なものとは，血の中にあるのではない。それは，性格の中にある」[46]という主張に見られるように，血（生物的なもの）と性格（内面的な性質）を同等視していなかった。また，ラガルドの反ユダヤ主義についても，それは，宗教的見地に基づくものであり，人種的見地に基づくものではなかった。しかし，ラングベーンの考えには，人種思想がはっきりと入り込んでいる。彼は，民族の美徳はすべて，血に受け継いだものを通して伝達されると考え，血（＝人種）の決定的重要性を強調した。民族の外面的な現象（文化）は，内面の性質（人種）の刻印を帯びるものとなり，民族の相違は，文化の相違ではなく，人種の相違に還元されたのである[47]。彼はまた，ラガルドの場合と異なり，ユダヤ人との人種的両立不可能性を強調した。とくに同化ユダヤ人は，ドイツ民族の身体に侵入してその血の純潔を汚しているとされ，「ペストやコレラ」と同一視された[48]。

ジャーナリストのヴィルヘルム・マルが1879年に「反セム主義」という言葉を造り，ユダヤ人との人種の違いを強調して以降，この言葉が急速に普及していったと言われるが，それと同時に人種主義的発想も広まっていった[49]。オイゲン・デューリング（1833～1921）は，1880年に『諸民族の存在，道徳，文化にとって人種的に有害な問題としてのユダヤ人問題』のなかで，これまで「ユダヤ人」という言葉が誤って，もっぱら宗教の名称だとされ，「人種あるいは民族」の名称だと考えられてこなかったと批判した[50]。彼によれば，ユダヤ人の宗教は，ユダヤ人の劣等な人種的性格から出たものだというのである[51]。このように，デューリングにおいても，宗教（文化）の相違が，人種の相違に還元されている。こうして，民族至上主義者たちが称揚する民族（文化）にも人種という観念が入り込み，「民族」と「人種」は渾然一体のものとなっていく。

ゴビノーがドイツにおいて「再発見」されたのも，世紀転換期のことである。強烈な反ユダヤ主義者ヴァーグナーのサークルに属するルートヴィヒ・シェーマンは，1894年にゴビノー協会を設立し，ゴビノーの著書の翻訳に取りかかった。ゴビノーの意図は，すでに述べたように，民衆と貴族との人種的相違から貴族の支配を正当化することにあったが，ドイツでは，人種混淆による人種の退化というペシミスティックな主張の方が，人種の純

46）同上書，53頁。
47）同上書，67頁。
48）同上書，68頁。
49）「反セム主義」という言葉は，『ガルテンラウベ』のような新しいマス・メディアを通して広まっていったといわれる。Claussen, *op. cit.*, S. 63.
50）*Ibid.*, S.44.
51）Kroll, *op. cit.*, S.122f.

粋性を保持することの重要性の強調というように歪められた形で受容された[52]。

民族という文化的概念に「血」という生物学的観念が入り込み，民族と人種が融合していく過程を決定的なものとしたのが，第Ⅰ章で取り上げたチェンバレンの『19世紀の基礎』である。チェンバレンは，人種概念については大きな混乱があるとして，「人種とは何か」という問題をさまざまな角度から考察しているが，彼自身，具体的な例をあげるときには，「古代ギリシア民族」と言ったり，「ギリシア人のような人種」と言ったり，「人種」と「民族」という概念を非常に恣意的に使用している[53]。このために，民族至上主義者たちは，チェンバレンがタキトゥスに依拠してゲルマン人の身体的特徴などについて述べたことを，ゲルマン「民族」の人種的純粋さを証明するものとみなすことができたのである[54]。民族至上主義者は，チェンバレンの主張を「一種の人種宗教」[55]として受容し，『19世紀の基礎』は彼らの新しいバイブルとなった。また，チェンバレンは，哲学ばかりか，当時の自然科学のさまざまな知識を披露しており，モッセによれば，民族至上主義に「科学的基礎を提供し」たのである[56]。

ところで，民族と人種が分かち難く融合していったころのドイツでは，自然療法，菜食主義，裸体運動，衣料改革運動など生改革運動と総称される運動が盛んであった[57]。これらは，それぞれ別個の組織をもち，成立した時期も異なっているが，文明批判的な危機感をもち，自然への回帰を理想とするという共通点をもっており，人的，思想的に民族至上主義運動と重なり合っていた。だが，他方で，現在のエコロジー思想や運動につながる面ももっており，これらの運動の評価は分かれている[58]。ここでは，いくつかの例を挙げて，これらの運動にも人種を強く意識する発想が浸透していたことを示したい。

ヴァンダーフォーゲル運動の急進的民族至上主義的グループは，ユダヤ人問題は「人種問題の一部」であると主張し，ヴァンダーフォーゲルも「これまでよりももっとその人種的，民族至上主義的課題を自覚」しなければならないという認識から，運動からのユダヤ人の排除を要求した[59]。

郷土は，自然に根ざした民族こそが真正であると考える民族至上主義者にとって，工業

52）Claussen, *op. cit.*, S.42.
53）Vgl. Claussen, *op. cit.*, S. 67-91.
54）モッセ，前掲書，100頁。
55）Claussen, *op.cit.*, S. 92.
56）モッセ，前掲書，132頁。Claussen, *op. cit.*, S. 95.
57）生改革運動については，Puschner, *op.cit*　および 竹中，前掲書を参照。
58）竹中，前掲書，224～25頁。
59）Puschner, *op. cit.*, S.63.

化や都市化の嵐から守らなければならない大切なものであったが，そのような意味で郷土を守ろうとする郷土保護運動にも，人種意識が入り込んでいた。土地に根ざしていることこそ，人種的純粋さを保証するものであり，大都市は「人種の墓場」だというのである[60]。

ウンゲヴィター率いるドイツ最大の裸体運動団体は，禁酒・禁煙，菜食を義務づけ，さらにその綱領に次のような点を掲げていた。「・・・6　精神病者，アルコール依存者，結核患者，性病患者，犯罪者等の婚姻禁止もしくは去勢によって，「退化した子孫」の現出を防止する。7　ゲルマン人種とロマンス人種，スラヴ人種，ユダヤ人種との婚姻禁止によって，・・・人種的純粋さを維持する。8　スカンディナヴィア人の参加を得て金髪・碧眼の育成政策を進め，ゲルマン人種を改良する」[61]。ここにはすでに，のちにナチスが実行することになる「衛生学的人種主義」，「人類学的人種主義」双方の措置，さらに育種措置がはっきりと姿を現している。

人種意識の普及・浸透という点について注目する必要があるのは，生改革運動のなかで，健康や病気が具体的に示され，また，人種の理想像および退化という現象がいわばヴィジュアル化されたことである。すでに18世紀から，古代ギリシアの彫刻を人間の理想像とする考え方は見られたが，世紀転換期には，このような考え方はいっそう強められた。また，人種論によって，身体の外形は精神的な内面の表れだともされた。特別な美は，人種的優越性の徴候だというのである。このような発想からすれば，裸体運動家が，身体的外見（＝人種）をことさらに重視するようになるのは，当然だと言えよう。

頭の形や体型の理想を示そうとする書物も，多数出版された。たとえば，婦人科医で人類学者でもあったカール・ハインリヒ・シュトラツは，『女性の人種的美』（1901）において，白人種，モンゴル人種（掲載されている写真は日本人），黒人種それぞれの女性の体型の違いを説明している。もちろん，彼によれば，白人女性のプロポーションがもっとも理想に近いものであるが，写真ばかりでなく，脚の長さや頭の大きさ，また肩幅の割合などを図示したものを掲載することによって，たとえば，モンゴル人種の女性は，腕と脚が短すぎ，身体全体の大きさの割に頭が大きすぎる，という説明がよりわかりやすいものとなっている[62]。まさに，人種の理想像や否定像がヴィジュアル化されているのである。

60）*Ibid.*, S.145f. なお，世紀転換期から第三帝国におけるラインラントの郷土保護運動，景観保護運動については，Thomas Lekan, *Imagining the Nation in Nature. Landscape Preservation and German Identity, 1885-1945*, Harvard University Press 2004を参照。

61）竹中，前掲書，220～21頁。

62）Michael Hau, *The Cult of Health and Beauty in Germany. A Social History, 1890-1930*, The University of Chicago Press 2003, S.86-100. シュトラツが掲載した写真と図は，89～94頁に掲載されている。シュトラツの議論で興味深いのは，女性の方が男性よりも純粋↗

以上見てきたように，19世紀から20世紀初頭にかけて，とくに世紀転換期のドイツでは，民族を至上の価値として称揚（あるいは信仰）する思想や運動が展開され，しかも彼らのいう民族はしだいに人種と融合していき，すでにのちのナチスを思わせるような主張すら出現していた。この時期に，ナチズムや右翼急進主義のイデオロギー的培養基，組織的前提，プロパガンダ装置が生み出されていたと言われる[63]のも無理からぬところがある。

だが，第Ⅰ章で見たように，人種論や人種主義的発想はドイツだけで広まっていたわけではない。そもそも，たんなる分類概念ではなく，人種主義的な概念としての「人種」はアメリカで創出されたと言われる[64]ように，アメリカにおいても，先住民に対する征服や隔離を正当化する必要，また，とりわけ南北戦争以降は，黒人の劣等性を主張する必要から，人種主義は強烈であった。

のちに国際人類学連合の会長やアメリカ科学振興会会長などの要職につくダニエル・ブリントンは，『人種と民族』（1860）において，人種的優越性を示すものとしてさまざまな身体的基準をあげ，「これらの基準で測ればヨーロッパ人種あるいは白人種はその序列の最高位にあり，アフリカ人あるいはニグロは底辺に位置する」と述べている。彼はまた，白人の混血は純粋の白人種よりも知能が低いので，白人女性の人種的純潔を守らねばならないとして，混血の危険性も強調していた[65]。

アメリカでは，世紀転換期になると，移民の問題をめぐって白人内部の序列化も進行していく。急増する南欧・東欧からの移民を警戒する声が高まり，彼らをアングロサクソン系とは区別する必要が生じたのである。人類学者のクロッソンは，「一般に高い教養という指標は［ヨーロッパの］北から南にいくにつれて減少する」と述べ，「精力と能力の点から言えば，ヨーロッパ諸人種の序列のなかで，ヨーロッパ人種［北方人種］が第一位にあり，アルプス人種が二位で，地中海人種は第三位となる」と主張している[66]。言うまでもなく，こうした分類は，ナチスの場合と同じく非常に恣意的なもので，マディソン・グラントは『偉大なる人種の衰亡』（1916）において，アイルランド系を北方人種に編入し，

↘な形態で人種の性格を表象しているという彼の主張である。男性の個性は，人種の性格を超えることもあるが，女性の場合にはそれはないという（89頁）。また，一般に上層階級における方が，美しい女性が多く見られると言い，この理由を，階級間の人種的質の相違に帰している（95頁）。このように彼の議論には，人種，ジェンダー，階級の問題が絡み込んでいて，人種概念の複雑さを示している。

63）Puschner, *op. cit.*, S. 25.

64）竹沢泰子「アメリカ人類学にみる進化論と人種」，阪上孝編，前掲書，456頁。

65）同上論文，466頁。

66）同上論文，469頁。

それによって，こうした分類や序列化に対する社会的な支持が増加したという[67]。

人種主義的発想の拡がりは，イギリスやフランスにおいても見られる。19世紀後半にイギリスを訪れたアメリカの黒人たちは，彼らに対する白人中産階級の態度の変化に言及している。ムーアによれば，『アンクル・トムの小屋』はイギリスでも非常に人気があり，舞台化もされたが，これがかえって，従順で子どものような黒人というステレオタイプを助長することになったという[68]。フランスにおいても，19世紀前半にはまだ白人種のなかに含まれていたアラブ人が，後半になると白人種への分類から排除されるか，白人種にとどまっている場合でも，ヨーロッパ系からは分離されて序列化されていく[69]。

一般に，「遅れてきた国民国家」ドイツでは，英仏の場合よりもナショナル・アイデンティティへの希求が強烈で，そのために民族の称揚ないし民族至上主義が広まったと考えられている。だが，国民意識を強化しようとする動きは，イギリスやフランスでも同じように見られた[70]。そうした動きのひとつとして，反ユダヤ主義が広がっていくのも，ドイツだけに限られたことではない。また，生改革運動のような運動の広がりも，ドイツだけの現象ではなかった[71]。そのうえ，世紀転換期に，自分たちの「人種」の退化が強く懸念されるようになっていく点も共通していた。このような危機感から急速に広まっていくのが，優生学あるいは優生運動（「衛生学的人種主義」）である。

Ⅲ　優生学の発展

「優生学」という言葉が，イギリス人でダーウィンの従兄弟にあたるフランシス・ゴル

67）同上論文，470頁。

68）ムーア，前掲論文，131～134頁。

69）杉本淑彦「白色人種論とアラブ人―フランス植民地主義のまなざし」，藤川隆男編『白人とは何か？―ホワイトネス・スタディーズ入門』（刀水書房，2005年）所収。

70）ホブズボウムは，19世紀末から第一次世界大戦にかけて欧米諸国では，国民という集団的アイデンティティを創造・強化するために，共通の過去を作りだそうとする動きが盛んになった，と論じている。エリック・ホブズボウム/テレンス・レンジャー編（前川啓治他訳）『創られた伝統』（紀伊国屋書店，1992年），407～470頁。

71）イギリスのある医師は，「優生学」という言葉が「世間に迷惑をかけようとする変わり者の愚行に利用されている」と嘆き，優生思想の講演会は「新マルサス主義者，種痘反対者，解剖反対者，クリスチャン・サイエンティスト，神秘論者，斎戒沐浴論者，菜食主義者といったもろもろのくだらない連中を勢いづかせるだけだ。これはゴルトン卿の望むところではないだろう」と述べているが，イギリスにも，ドイツの「生改革運動」のような運動が広がっていたことがわかる。ダニエル・J・ケヴルズ（西俣総平訳）『優生学の名のもとに―「人種改良」の悪夢の百年』（朝日新聞社，1993年），104頁。

トン（1822～1911）によって造り出された（1883年）ことはよく知られている。彼が意図したのは，「生存により値する人種または血統に対し，劣った人種あるいは血統よりも，より速やかに繁殖する機会を与えることによって」，人類を改善する「科学」を創り出すことであった[72]。ゴルトンは，カール・ピアソンという協力者を得て，1901年に『バイオメトリカ』という専門誌を発刊し，また，1904年の第一回イギリス社会学会において，「優生学―その定義，展望，目的」と題する講演を行った。こうして，20世紀に入って，優生学は多くの知識人の間に急速に広まっていくことになる。1907年には，優生学の啓蒙を目的とする優生教育協会という全国組織が設立された[73]。

アメリカで指導的優生学者となるのは，チャールズ・ダヴェンポート（1866～1949）である。彼は，1904年に実験進化研究所の所長となり，メンデルの遺伝学を人間の遺伝にも応用しようとする研究を行った。さらに彼は，1910年，鉄道王ハリマンの未亡人の資金援助を得て，実験進化研究所の付属施設として優生記録局を設立した。この施設の調査員たちは，「形質調査法」というマニュアルに基づき，人間の遺伝に関する膨大な数のデータを収集した。その数は，1918年初めまでに50万枚以上，39年までには100万枚以上になり，とくに英米の優生学者にとっては「権威ある」資料となった[74]。

ダヴェンポートは，国民全体の遺伝的形質を改良するために，より良い子孫をつくることがいかに重要かを強調し，女性が相手の生物学的・遺伝的要素を調べてから結婚するようになることを期待した。だが，もっと重視したのは，「劣等者」に子どもを産ませないようにすることであり，移民についても，遺伝的に劣等と認められる個人や家族の入国を拒否するべきだと主張した[75]。

ドイツでは，1891年，ヴィルヘルム・シャルマイヤー（1857～1919）が『文明人を襲う身体的退化』を発表した。この本はそれほど注目されなかったが，ここにはすでにのちの優生学の基本的考え方がほとんど含まれていた。1900年，鉄鋼王のクルップが後援して，論文コンテストが行われた。論題は，「われわれは，国内の政治的発展と国法への応用のために，ダーウィニズムの諸原理から何を学びうるか」というもので，一位になったのが，シャルマイヤーの論文であった（これは，1903年に『諸民族の生命過程における遺伝と淘

72）ケヴルズ，前掲書，3頁。
73）米本昌平・松原洋子・橳島次郎・市野川容孝『優生学と人間社会―生命科学の世紀はどこへ向かうのか』（講談社，2000年），22～25頁。
74）ケヴルズ，前掲書，98～102頁，米本他，前掲書，33頁。
75）ダヴェンポートについては，ケヴルズ，前掲書，81～102頁を参照。

汰』として公刊された)[76]。

ドイツにおける優生学のもう一人の創始者は，アルフレート・プレッツ（1860～1940）である。彼は，『わが人種の能力と弱者の保護』（1895）を著し，「人種衛生学」という言葉を造った。以後，ドイツでは，「優生学」という言葉よりも「人種衛生学」の方が頻繁に使用されるようになる――もちろん，「優生学」あるいは「生殖衛生学」を用いたアルフレート・グロートヤーンのような例外はある――が，プレッツが「人種衛生学」の内容として考えていたのは，上記のダヴェンポートとまったく同じこと――「劣等者」の淘汰――であった[77]。プレッツは，1904年から人種衛生学のための雑誌（『人種＝社会生物学論叢』）を発行するようになり，1905年には，「(ベルリン）人種衛生学会」を設立した。会員数は，最初はわずか31人で，会の存在を公にすることもない「私的な集まり」のようなものであったが，1909年に上記の雑誌で会の目的が公表され，1910年には「ドイツ人種衛生学会」としての規約も作られ，会員も約500人に増大した[78]。

以上のように，優生学があまり広がらなかったフランスを除いて[79]，英米とドイツでは，ほぼ同じころに学問としての優生学あるいは人種衛生学が成立してくる。そして，知識人の間に多くの支持者を獲得していった。また，スウェーデン，ノルウェー，スイス，イタリアなどにも，さらに1920年代には日本や南米諸国にも広がった。英米では，さまざまな団体による啓蒙活動が，優生学（思想）の普及，流行を引き起こした。イギリスには，全国的組織の優生教育協会があったし，アメリカでは，各地で設立された団体が活発な活動を展開した。たとえば，ニューヨークのゴルトン協会，ミシガン州の人種改良財団などである。また，性教育や性病予防に携わる団体にも，優生思想が浸透していった。イギリスのように全国組織を設立しようとする努力は，1923年，アメリカ優生協会の設立に結実した[80]。

優生学の発展にともなって，国際的な協力も進展していく。1912年，ロンドンで第1回国際優生学会が開催された。目的は，「人種を改良あるいは退化させる要因に関する諸研究の結果をさらに広く知らしめ，現在の知識が法律制定へ向けた活動の正当な根拠となる

76) Peter Weingart/Jürgen Kroll/Kurt Bayertz, *Rasse, Blut und Gene. Geschichte der Eugenik und Rassenhygiene in Deutschland,* Frankfurt/M 1996, S. 196-198. 米本他，前掲書，62～67頁。

77) プレッツがなぜ「人種衛生学（Raasenhygiene)」という言葉を使用したのか，という問題については，米本他，前掲書，69～71頁を参照。

78) Weingart u.a., *op. cit.,* S.201-208.

79) フランスにおける優生思想については，米本他，前掲書，142～167頁を参照。

80) ケヴルズ，前掲書，107頁。

か否かについて議論し，国際委員会等の組織を設立することによって，現在の各協会・団体と研究者の協力体制を整えること」[81]であった。欧米各国からプレッツやダヴェンポートなど300人以上が参加したこの会議では，各国の優生学者の接触・連携を強化するために「国際優生学常設委員会」を設立することが決定された[82]。

20世紀に入って優生学（思想）が急速に広がっていった背景には，急激な工業化・都市化の進展によって「危機に瀕した」社会を維持ないしは改革しなければならないという認識があった。また，社会階層による，あるいは人種による出生率の相違も強い危機感を与えた。イギリスの社会主義者シドニー・ウェッブは，こう述べている。「今この瞬間，イギリスでは半分，いや３分の２に近い家庭が産児制限をしている一方で，カトリック系のアイルランド人やポーランド人，ロシア人，ドイツ系のユダヤ人たちが何の制約もなく子どもを産み続けている。・・・こうした状態がもたらすのはイギリスの国民的な衰退以外の何物でもない」[83]。ドイツのシャルマイヤーも，社会階層による出生率の相違は，「より才能がある人びとの自己抹消」につながることを憂慮していた[84]。

とはいえ，優生学者たちが実施を求めて提案した政策には，大きく分けて二つの方向があった。社会にとって有益な子孫を積極的に増加させることを主眼とする「積極的優生主義」と，社会的に不適な子孫を減らそうとする「消極的（禁絶的）優生主義」である。優生思想は，保守派から急進派まで政治的立場を問わず，当時の社会の維持ないしは改革が必要だと考える多くの人びとを引きつけたが，いずれの方向を重視するかは，人によって大きく異なっていた。

「消極的（禁絶的）優生主義」に基づく政策がいちはやく実施されたのは，アメリカである。アメリカでは，すでに19世紀末から精神障害者の結婚を何らかの形で制限する法律が多くの州で出されていたが，1907年にインディアナ州で，施設に収容されている精神障害者の断種を認めた最初の断種法が制定された。その後，インディアナ州の断種法をモデルとして，1913年までに16州で断種法が成立している[85]。これらの断種法では，精神障害や反社会的行動が遺伝の結果とみなされ，施設の収容者の断種の適否が，医師による委員

81）シュテファン・キュール（麻生九美訳）『ナチ・コネクション―アメリカの優生学とナチ優生思想』（明石書店，1999年），39～40頁。

82）同上書，38～40頁。だが，第一次世界大戦の勃発によって，「第２回国際優生学会」は延期され，「国際優生学常設委員会」も開かれなかった。このような活動が再開されるのは，戦後のことになる。（同上書，45頁）

83）ケヴルズ，前掲書，132頁。

84）Weingart u.a., *op. cit.*, S.134.

85）米本他，前掲書，34～35頁。

会によって決定されることになっていた[86]。

のちに第三帝国の断種法に大きな影響を与えたとされるのは，1909年のカリフォルニア州の断種法である。カリフォルニア州では，精神病者と認定された場合，断種された者しか施設を出ていけず，梅毒患者の断種や性犯罪者の罰としても断種が行われた。断種件数もずば抜けて多く，1921年までのアメリカ全体の断種件数3233件の実に79パーセントを占めた[87]。

イギリスでは，ハヴロック・エリスなどの急進派は，断種法のような優生立法をきっぱりと拒否した。また，優生学者の間にも，人間の遺伝に関する知識はまだ初歩的な段階にしかないので，アメリカのような優生立法は「性急であり，誤っている」とする意見があった。そのため，強制断種の実行を模索していた優生教育協会も，そのような要求を控えるようになったという[88]。もちろん，アメリカでも断種法に対する批判はあった。断種の基準への疑義が法廷で争われたり，法案が州議会で可決された後に，州知事が拒否権を発動する場合もあった。また，第一次世界大戦までに，断種法を違憲と断定する裁判所も増えて，計7州の断種法に違憲判決が出された[89]。

ドイツでは，ゲツァ・フォン・ホフマンが『アメリカ合衆国における人種衛生学』（1913年）を著し，アメリカにおける結婚制限や移民制限などの優生政策について紹介したが，なかでも，断種法について詳しく報告し，これは「劣等な人びとの再生産を阻止するにはもっとも簡単な手段である」と評価した[90]。しかし，たとえばシャルマイヤーは，人口を増加させることを重視し，結婚制限や断種を人種衛生学の中心的措置だとは考えていなかった[91]。ドイツにおいても，優先されるべき優生政策については，大きく意見が分かれていたのである。

優生学の発展・普及について指摘しておかねばならないのは，優生学と人種思想の関連である。チェンバレンの人種主義思想に優生学的発想が見られることは，すでに第Ⅰ章で触れたが，逆に多くの優生学者も人種主義の影響を免れてはいなかった。たとえば，アメリカの優生学者ダヴェンポートは，「一般的に言って，ユダヤ人種の遺伝的形質は非ユダヤ人種の遺伝的形質に比べて劣性である」と述べている[92]。アメリカ優生協会の役員グラ

86）同上書，35頁。
87）同上書，35～36頁。
88）ケヴルズ，前掲書，185～86頁。
89）同上書，190～192頁。
90）キュール，前掲書，41～43頁。
91）Weingart u.a., *op. cit.*, S.167.
92）ケヴルズ，前掲書，133頁。

ントも，その著書『偉大なる人種の衰亡』において，「北方人種はその血が純粋であるときにのみ，他の人種にうち勝つことができる」といった強烈な人種論を展開している[93]。ヴァインガルトたちは，人種人類学と人種衛生学が直接結びついたことが，ドイツの人種衛生学の特徴であるとしている[94]が，人種主義と優生学の結びつきは，ドイツ特有の現象ではなかったのである。

人種混淆の問題についても，のちのナチスのように人種混淆が有害であると主張する立場は，ドイツばかりかアメリカでも見られた。上記のグラントは，「血の純粋性」を強調し，白人種のなかでも，北方人種と地中海人種との結婚は人種の力を弱める「雑種化」しかもたらさないと主張している[95]。たしかに，ドイツの人種人類学者オイゲン・フィッシャーは，ドイツ領南西アフリカの住民を調査した『レホボートの雑種』(1913) において，人種混淆は有害であるという結論を引き出している[96]が，これに対して，シャルマイヤーやプレッツは，むしろ人種混淆を積極的に評価していた。シャルマイヤーによれば，近代における交通の発達によって人種混淆が行われやすくなったことは，近代の文化が人間の淘汰に及ぼした数少ない好都合な影響の一つであった[97]。

以上のように，優生学の展開についても，ドイツと他の欧米諸国のあいだの大きな相違は見られない。むしろ，優生学の発展をリードしていたのは，アメリカであった。

おわりに

第三帝国において，ヒトラーやヒムラーたちナチ党幹部は，アーリア人種――あるいはゲルマン人種や北方人種という表現も用いられた――こそ種々の人種の中で，唯一文化を創造する能力をもっていると考えていた。だが同時に，優秀なはずのアーリア人種も混血によって「劣等な血」が混じれば退化する危険があるので，さまざまな措置を講じて「血の純粋性」を守らねばならないという強迫観念にも囚われていた。

しかし，このような考え方は，けっしてナチ党特有のものでも，またドイツに特有のものでもなかった。ナチスの人種主義には，人類学的人種主義，さらに優秀な人種を「科学」の力によって増加させようとする優生学（思想）など，19世紀以降の欧米諸国で登場して

93) 小林清一「人種主義と優生学―進化の科学と人間の『改造』(アメリカの場合)」阪上孝編，前掲書，502頁。
94) Weingart u.a., *op. cit.*, S.201-208.
95) ケヴルズ，前掲書，134頁。
96) Weingart u.a., *op. cit.*, S.100ff.
97) *Ibid.*, S.101.

くる多様な潮流が流れ込んでいた。

たしかに，ドイツでは，民族を神聖視する「民族至上主義」思想や運動が19世紀後半から広まり，しかも，称揚される民族は人種と分かち難く結びついていた。だが，アメリカでも，先住民や黒人との関係，さらに続々と流入してくる移民の問題に対処するために，「白人至上主義的」，さらに「北方人種至上主義的」ともいうべき発想や態度が強く見られた。また，人種主義と優生学の結びつきも，アメリカでも顕著であった。このように，20世紀初頭までは，とくにドイツの人種主義が他の諸国と比べて強烈だったとは言えない。

世紀転換期の欧米諸国は，工業化・都市化の急激な進展によるさまざまな社会問題の発生（売春や犯罪などの増加），産児制限の普及による出生率の低下（当面は，社会階層による出生率の相違として現れる）といった共通の問題に直面していた。しかも，帝国主義時代におけるナショナリズムの高揚，また労働運動の発展によってエリートたちが抱いた危機感なども絡み合い，「人種」や「民族」，「階級」，「健康」や「遺伝」などが人びとの強い関心を引きつける肥沃な土壌が存在したことも共通していた。優生学の国際的協力体制の構築は，このような状況を背景として可能だったのであり，人種主義の普及も同じ土壌に根ざしていたのである。

それでは，なぜドイツだけで「人種主義国家」の成立が可能になったのであろうか。第一次世界大戦以降の時代に，人種主義の拡がりという点でドイツと欧米諸国のあいだの違いが生じてくるのであろうか。この問題については，次の課題としたい。